慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	スペイン語の動詞と構文が持つ他動性に関する認知言語学的考察 : 文法形式と意味との乖離を巡って
Sub Title	
Author	田林, 洋一(Tabayashi, Yoichi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.27 (2012.) ,p.151- 174
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20120530-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

スペイン語の動詞と構文が持つ他動性に関する認知言語学的考察

――文法形式と意味との乖離を巡って――

田　林　洋　一

1．序

本稿では文法形式と意味の変化を通して，スペイン語の他動性に関して若干の考察を加えることを目的とする。

2．文法形式と意味の変化について

文法形式（あるいは文法）と意味の関係についての一つの伝統的な考え方は，文法形式は意味とは完全に乖離して存在しているというものである。Chomsky 以前の構造言語学的な Bloomfield らの考え方では，文法形式（狭義の統語論及び形態論）は語の間の結合，配列，及びそれに準ずる公式を規定する一種の約束事であり，そこで行われる操作（多分に変形的）は意味に全く影響を与えない（即ち，文法形式が変わっても意味は変わらない）という存在であった。

伝統的な立場に立つと，文法形式が異なる複数の文でも，一定の変形規則にさえ従っていれば，当該文の意味が同じということになる。例えば，以下のような文のペアは，文法形式が変わっても意味は同じである。

（1）　a.　Cervantes escribió esta novela.

　　b.　Esta novela fue escrita por Cervantes.

（2） a. Visitamos la catedral donde se celebró su boda.
b. Visitamos la catedral en que se celebró su boda.
c. Visitamos la catedral en la que se celebró su boda.

（1）は能動態と受動態のペアであり，伝統的な考え方では「セルバンテスがこの小説を書いた」と「この小説はセルバンテスによって書かれた」は意味が同じと規定される。（2）では関係詞 donde, en que, en la que はそれぞれ同義であり，「私達は彼の結婚が行われた大聖堂を訪ねた」というものである。

これと対立して，文法形式と意味は不可分の関係にあり，文法形式が変わると意味が変化するという考え方が存在する。即ち，文法形式には意味的要素が深く浸透しており，文法レベルの些細な書き換えであっても，必ず意味の変化を伴うという考え方である。

20世紀前半は伝統的な考え方が言語学の大勢を占め，Chomsky による変形生成文法の考え方が広まると，それに従った研究が爆発的に盛んになった。その後，今日に至るまで言語学は，文法と意味の乖離（即ち，文法形式が変わっても意味は同じという想定）を如何に打ち破るかという点で進展してきたといっても過言ではない。徐々に破綻を見せていくのを目の当たりにした変形生成文法学者は，今度は「表層構造（surface structure）」と「深層構造（deep structure）」という二つの基準を設けた。これは，例えば能動態と受動態は同じ深層構造から派生した二つの表層構造であり，事実上，意味は同じであるとする考え方である。この考え方によって，変形という操作は事実上放棄されるのだが，二つの表層構造は文法形式が異なるだけで，実質的な意味は同じという，「文法形式は意味に影響を与ええない」という基本姿勢は崩れてはいない。

一方，1970年代後半にそのアイデアが出現し，1980年代から研究が盛んに行われた認知言語学的な立場では，意味と文法形式は相互に影響しあっており，文法形式が異なるならば意味も異なる，というテーゼを持つ。例

えば，英語の二重目的構文（3 a）と，to を取る与格構文（3 b）は伝統的な考え方では意味が同じであるが，認知言語学的な立場では異なる。なぜなら，その命題をキャンセルするような文を後続させると，二重目的語構文では容認されない奇妙な文となるが，to を取る与格構文では容認されるからである[(1)]。

---

(1)　to を取る与格構文が容認されるのは，二重目的語構文が持つ存在論的メタファーの瞬時性に因る。基本的に，前置詞 to はある事物が経路を通って移動していく方向性をマークする前置詞である。従って，to を取る与格構文では問題の行為（give）が瞬時になされることを含意しない。この点で，to を持たない二重目的語構文はその行為が瞬時になされる可能性を秘めているため，結果が重視される。以下の文を参照。

（ i ）　a.　?John gave a book to Mary immediately.
　　b.　John gave Mary a book immediately.

（ i a）は副詞 immediately を付加することによって，容認度がやや低くなる（しかし，受け渡しの行為が目にもとまらぬ速さで行われたという過程を重視する解釈ならば成立しうる）。一方，同様の条件である二重目的語構文の（ i b）には特に有標的な解釈は存在しない。よって，to を取る与格構文は過程が重視されるという性格上，その結果をキャンセルすることができるのに対し，結果を重視する二重目的語構文はその結果をキャンセルできない。

また，二重目的語構文の結果の含意は，二つの目的語の隣接関係に基づく随伴関係から導き出されると分析することも可能である。この時，近接性の関係は，そのままメトニミー的な拡張による意味を同時に表すことになる。近接性がそのまま随伴関係を表す例として，以下を参照。

（ ii ）　a.　g huan kii
　　ART Juan house
　　‘Juan’s house’
　　Langacker（1993：19）

　　b.　jakare ruguai
　　crocodile tail
　　‘crocodile’s tale’
　　Langacker（2004：35）

　　c.　Inepo kari-ne
　　I　　house-FUT
　　‘I will have a house’
　　Langacker（2004：36）

（ ii a）はパパゴ語（papagu），（ ii b）はグアラニ語（guarani），（ ii c）はヤ

（３） a. *John gave Mary a present, but she didn't receive it.
b. John gave a present to Mary, but she didn't receive it.

畢竟，伝統的言語学の言う「意味が同じ」とは「命題真理値が等価」というだけであり，その含意される意味が異なる場合がある。例えば，二重目的語構文と to を取る与格構文のペアも，（３）が示すように違いが生じる[(2)]。

伝統的な「文法形式が変わっても意味が同じ」とは，文法は意味とは独立して存在し，相互に影響を与えることはないという考え方に通ずる。即ち，文法には意味とは独立した書き換え規則が存在し，当該命題はその書き換え規則を経ても変化しないということである。従って，「意味が同

キ語（yaqui）の例であるが，どれも二つの語の隣接の解釈がそのまま所有関係を表している。二重目的語構文の更なる議論は山梨（2009：174-183），Goldberg（1995：75）他を参照のこと。

(2) 与格構文と二重目的語構文を，＜経路から到達点＞への焦点シフトの認知プロセスの違いから分析した研究に Langacker（1986：14）がある。

（ｉ） a. Bill sent a walrus to Joyce.
b. Bill sent Joyce a walrus.

Langacker や山梨（2009：97）によると，（ｉa）は被動作主の walrus が直接目的語のランドマークとして選択され，Bill から Joyce への移行する walrus の移動経路が焦点化されている。一方，（ｉb）は walrus の移動先の所有領域が焦点化されている。従って，walrus が Joyce に渡ったという所有関係（結果状態）が含意される。

また，以下に示すように与格構文に対応する二重目的語構文の間接目的語には，ある種の制限がある。

（ii） a. I sent a walrus to Antarctica.
b. ?I sent Antarctica a walrus.
c. I sent the zoo a walrus.

Langacker（1986：18）

Antarctica という物理的な場所が walrus の所有者になることはできないので，（ii a）に対応する二重目的語構文（ii b）は容認度が下がる。しかし，（ii c）のように，間接目的語に出現する項が場所であっても，その場所の背後に所有者を含意すると（即ち，場所を参照点として所有者に辿り着くような近接性のメトニミーが成立すれば）容認される。

じ」でも，通常，ある事態ないしは状況を複数の表現で描写することができる，と考えられる。即ち，ある事態を一つの文法形式を用いて表現したならば，別の文法形式で記述しても矛盾が起こらないということである。このような意味は真理条件的意味（truth-conditional meaning）と呼ばれ，対象は話し手から独立した客観的な記述がなされるものと期待される。

しかし，文法形式の表す意味が「客観的な真理条件的意味」のみに限定されるわけではない。以下の文では全て事象は変わらないが，「主観的意味」は変化している。

（4）a. Este camino está una cuesta bajada.
　　b. Este camino está una cuesta subida.
（5）a. La farmacia está a la izquierda de la cafetería.
　　b. La cafetería está a la derecha de la farmacia.
（6）a. Juan se parece a Pedro.
　　b. Pedro se parece a Juan.
（7）a. El barril se ha quedado medio vacío.
　　b. El barril se ha quedado medio lleno.

（4）～（7）のペアの真理条件的意味は同じであるが，話し手の事態に対するとらえ方が違うために異なる文法形式（ないしは語彙）が用いられている。例えば，（6）のペアでは Juan を知っている話し手は（6 a）を，Pedro を知っている話し手は（6 b）を選択するであろう。また，（7）のペアに見られるように，話し手の心的態度が異なる（楽観的か悲観的か）と，用いられる文法形式や意味が異なることもある。

以上の点から，本稿では，近年の認知言語学的視点（即ち，文法形式が変われば意味も変わる）という立場を取る。なお，以下からは文法形式を総称して「構文（construcciones）」と呼ぶが，これは狭義の語の配列だけでなく，統語的・形態的な語の配列もそれ自体で意味を持ちうるという

広義の文法形式を指す。

本稿で述べる「構文」とは，「全体は部分の総和である」とする合成原理（compositionality principle）とは対極の概念をなすと一般にみなされる。しかし，合成原理には「強い主張」と「弱い主張」がある（Taylor & 瀬戸（2008：43））。このうち，本稿の「構文」は強い合成原理に反し，弱い合成原理に与すると考える。

強い合成原理は「複合表現の意味は，①部分の意味，②部分の意味の合成のされ方，によって完全に決定される」と主張し，更に以下のような原理の細則に基づく。

（8） a. 複合表現の部分は，当該の言語体系の中で定まった意味を持つ。
b. 部分が複合表現に合成されるとき，定まった合成法がある。
c. 部分の意味は複合表現の中で欠けることなく保存される。
d. 部分の意味及び合成のされ方によらない「プラスの意味」が複合表現に生じることはない。

一方，弱い合成原理は「合成原理は部分的にしか成り立たない」と主張する。その中には，複合名詞句，メタファー，イディオム，レトリックなどの他にゲシュタルト知覚や意味の弾性（semantic flexibility）が含まれる。また，一見イディオムでない表現も，合成性の原理を破って聞き手に知覚される。以下の文を参照。

（9） a. El balón está debajo de la mesa.
b. Juan pateó la mesa.

（9 a）にはどのような状態でボールがテーブルの下にあるのかの情報は記載されていない。もしかしたら机がロープに吊り下げられ，その真下に

ボールがあるのかもしれないし，逆さまになった机の下に押し潰されるようにボールがある可能性もある。しかし，聞き手はごく自然に「四本の脚が地面を支えた状態で立っている机の下にボールがある」という情景を知覚する。この情報は各単語の意味を超えた，文化的またはゲシュタルト的なものである。

また，（9 b）も Juan が（恐らく足の甲や側面を使って）机の（恐らく脚ないしは側面を）蹴ったという解釈が導き出されるが，蹴るための足やテーブルのどの部位を蹴ったかなどの情報は語彙項目内にも，文法形式内にも存在しない（patear が「足の使用を前提とした行為」と語彙項目に記載されている可能性は高いが，ただ足だけを使うのではなく「体全体を使って蹴る」ことも可能である）。この意味は，ゲシュタルト的な知覚の他に，Langacker（1984）の述べる「活性領域（active zone）」の解釈も可能である。

更に，ゲシュタルト知覚を超えた語の辞書的知識と文化的知識（百科事典的知識）も，文の理解に多大な影響を与える。これらの情報は語彙項目に記載されているわけではなく，また，文法形式から導き出されるものでもない，語用論的な性質を持つ。

（10）　Juan vio un diamante en su dedo anular y suspiró profundamente.

（10）の文を理解するには，①ダイヤモンドは指輪についている宝石のことで，たまたま指の上に転がっているわけではない，② anular という語が示すように，「指輪のための指」即ち左手の薬指を指す，③ Juan は左手の薬指に指輪をはめているということで「結婚」を表す文化の中にいる，の三点が想定されていなければならない。①は先に挙げた（9）の解釈が必要とされるが，②及び③は文化的な知識であり，結婚した人間が左手の薬指に指輪をはめない文化圏の人間には理解できない性質のものである。

以上を総括すると，ある文を理解するには，①合成性の原理に基づく各語彙項目の意味，に加え，②ゲシュタルト知覚によって拡張された意味，③文化的・社会的知識，④ある限定的なコンテクスト，が必要ということである。実際の言語運用では，①～④の区別はファジー（fuzzy）なもので，話し手は特に意識してこれらの情報を使い分けているわけではない。

3．他動性に関する考察

さて，（3）は二重目的構文と to を取る与格構文の比較であるが，その違いは畢竟文法形式の他動性（transitividad）に起因する。他動性とはある対象物に対して当該動詞句がどの程度影響を及ぼすかという指標であり，同じ動詞でありながら用いられる構文（文法形式）によって他動性が変化することがある。例えば，以下の文を参照。

（11） a. Mary sang.
b. Mary sang to the baby.
c. Mary kissed the baby.
d. Mary kissed the baby awake.
e. Mary sang the baby to sleep.

池上（1991：89）

（11a）の sang は自動詞であり，他の対象に影響を与えることはなく，自己完結的である。一方，（11b）の sang には付加詞 to the baby が与えられ，影響を与える対象を明示してはいるが，その効果が the baby に届いたかどうかは不明である。従って，以下のように命題をキャンセルすることが可能である。

（12） Mary sang to the baby, but he wasn’t listening.

（11c）では，Mary のキスした影響は確実に the baby に届いており（即ち，Mary が the baby にキスをしたことは事実である），他動性は（11b）よりも高い。（11d）では，Mary がキスをしたことで対象物 the baby に「起きる（awake）」という変化が生じており，他動性は最も高い。（11e）も（11d）と同様に，Mary が歌うことによって the baby が「眠る（sleep）」という変化を起こしているため，他動性は高い。

（11）の観察から，構文自体にも他動性の強さを読み取ることができる。おおよそ，他動性は，（13a）から（13d）に行くに従って高くなる。

（13）　a.　主語＋自動詞
　　b.　主語＋自動詞＋付加詞
　　c.　主語＋他動詞＋直接目的語
　　d.　主語＋他動詞＋直接目的語＋付加詞

（3）に戻ると，（3a）の二重目的語構文では Mary が目的語として機能しているため他動性が高く，よって Mary がプレゼントを受け取らないという解釈は存在しない。しかし，（3b）の to を取る与格構文では，Mary が to 前置詞句に導かれて出現しているため他動性が低く，命題のキャンセル（Mary がプレゼントを受け取らないという解釈）が可能となる。このように，他動性は動詞の種類だけでなく，表現されている構文（文法形式）によっても決定される。

また，スペイン語には，同じ動詞でも自動詞と他動詞の両方の機能を持つもの（即ち，他動性が低い場合と高い場合を同じ動詞で表現すること）が多い。

（14）　a.　Juan come en el comedor.
　　b.　Juan come una manzana en el comedor.
（15）　a.　Juan trabaja en una fábrica.

b.　Juan trabaja la tierra.

（14a）ではフアンが食べるという事実がクローズアップされるのに対し，（14b）では食べる対象（una manzana）が直接目的語として明示され，他動性が高くなる[3]。（15）のペアも同様に，（15a）ではフアンが働いていることが際立ちを持ち，（15b）はその対象（la tierra）を明示することで，他動性が高くなる。

更に，動詞の意味内容も直接目的語を持つかどうか（即ち他動性の高さ）に応じてわずかながら変化する。（15a）の trabaja は単に「働く」という意味であり，フアンが具体的にどのような働き方をしていたのかという様態に関する情報はない（（15a）では，フアンが工事現場の監督という解釈もあれば，事務従事者，工学者などの解釈も可能である）。一方，（15b）の trabaja は目的語 la tierra の存在により，「畑を耕す」という動作の様態が動詞の意味に付与される。

他動性の高さは主語や目的語など動詞が要求する項（argumento）の種類によっても異なる。即ち，他動性は，被対象物が人間ないしは人間に準ずるものかどうか，そして，動作主が被対象物にどの程度の影響をもたらしているのかという語用論的な尺度によっても変化する。例えば，受動構文でもその対象が変化すると（即ち，対応する能動文と比較すると）容認度に差が出る。

（16）　a.　Juan desertó el ejército.

---

(3)（14b）の Juan のリンゴの食べ方には「動詞の限界」という観念が想定されている。Juan が食べているリンゴは，食べつくしてしまえばなくなる。従って，現在進行形にすると「食べる」行為が線的に解釈され，「食べ尽くす」という結果を想定した意味は放棄される（ｉ）。この時，「～尽くす」を意味する再帰代名詞を付与すると容認度が下がる（ii）。

（ｉ）　Juan está comiendo una manzana.

（ii）　?Juan se está comiendo una manzana.

b.　*El ejército fue desertado por Juan.

（17）　a.　Todos los generales desertaron el ejército.

b.　El ejército fue desertado por todos los generales.

（16a）では，フアンという一兵士が軍隊を脱走したからといって，直ちに軍隊が壊滅する（即ち，軍隊が甚大な影響を受ける）ことにはならない。従って，影響が及ぼされる el ejército を取り立てて受動構文の主語にすると奇妙な文となる（16b）。しかし，（17a）のように全ての将校が軍隊を脱走したならば，軍隊自体が壊滅するほどの影響を蒙ることになる。従って，影響が及ぼされる el ejército を取り立てて受動構文の主語にしても容認される（17b）。

この傾向は，スペイン語のみならず英語でも見られる。

（18）　a.　The moon was reached for the first time in 1969.

b.　*Tokyo Station was reached by Peter.

（19）　*Alice is resembled by Tom.

（18a）では，アポロ11号による初の到達によって，月の存在には人類に対して心理的に多大かつ有意義な「変化」がもたらされたと想定されるために受動構文が容認される。しかし，（18b）のように，Peter という人間が東京駅に着いたからといって，直ちに駅が聞き手に対して心理的に多大な「変化」をもたらすとは考えにくい（しかし，Peter が指名手配中の犯人で，行く先々で殺人を繰り広げているような特殊な文脈では（18b）も容認されうる）。また，（19）では Tom が Alice に対して余程「似るように」働きかけない限り，受動構文は容認されないであろう。

更に，以下のような文脈を与えられた場合，前者は適格だが，後者は容認しづらくなる。

(20) a. ¿Qué leyó Juan? – El leyó la novela de Cervantes.
b. ¿Qué leyó Juan? – #La novela de Cervantes fue leída por Juan.

スペイン語では基本的に後に来る要素が新情報を担う。(20a) は，前文の問いに適格に返答しているが，(20b) は前文の求める答え (la novela de Cervantes) を既知情報が担う場所 (即ち，動詞の前の位置) に提示しているため，容認度は低下する。

このように，他動性は，①動詞の種類，に加え，②構文 (文法形式) の種類，③項が持つ要素の種類，④文脈あるいは情報構造に代表される語用論的要素，によっても異なるということである。

4．他動性の高低の指標

他動性の高さを測る一つの指標として，(3) で示したように当該命題をキャンセルする文を後続させるという方法が取られる。しかし，キャンセルが可能かどうかは，同じ動詞であっても日本語や英語，スペイン語など言語間によって差異があるようである。

本稿では，まず他動詞 ahogar を取り上げる。通常，「溺れ (させ) る」を和西辞書で引くと ahogar ないしは ahogarse が出てくるが, ahogar (se) と「溺れ (させ) る」の他動性は同じではない。

(21) a. Juan ahogó a Carmen.
b. フアンはカルメンを溺れさせた。

スペイン語の (21a) ではカルメンが死んだことが含意されるが，それに対応する日本語の (21b) はそうではない。従って，当該命題をキャンセルさせると容認度に差が出る。

（22）　a.　*Juan ahogó a Carmen, pero ella no murió.

b.　フアンはカルメンを溺れさせたが，彼女は死ななかった。

（22）のペアが意味するところは以下の通りである。即ち，（22a）の ahogar は対象物が影響を蒙った結果，それがどうなったかという結果を含意するのに対し，（22b）の「溺れさせた」には対象物が影響を蒙った結果の含意がない。

このように，行為（溺れさせる）とその結果（死ぬ）との間に強い因果関係がある場合，一方が他方へ転用されることがある。例えば，dibujo は「デッサン」の他に「描くこと」という行為も表すことができるが，dibujo en la pared は「壁に描かれたもの（作品）」という行為の結果による解釈しかない。日本語でも，「あやまる」には「誤る」と「謝る」があるが，語源的にこの二つは「誤りを犯した結果，迷惑をかけた人に謝る」という行為と結果の因果関係の近接性から来ている[(4)]。

さて，（22b）をスペイン語にする場合，寧ろ（23a）のように tratar de を伴って表す方がよいと思われる。また，状況によっては迂言法 ir a で表される場合もある（23c）。

（23）　a.　Juan trató de ahogar a Carmen, pero ella no murió.

b.　フアンはカルメンを溺れさせようとしたが，彼女は死なな

---

(4)　この近接性の因果関係は，時として文法化（gramaticalización）を引き起こすことがある。例えば，英語の完了の助動詞 have は，所有の意味を表す本動詞 have（持っている）に由来する。I have read a book. は，もともと I have a book read. のような構文から派生している。後者では，「本を読んでしまってそれを所持している」という行為の結果としての状態に焦点が当てられている。しかし，後に行為に言及しつつも先行する「読む」という行為に重点を移していき，最終的に have の所有の意味が弱まり助動詞化したと考えられる。スペイン語でも，完了を作る助動詞 haber は13世紀には aver という形で，tener と共に「保持する」「持つ」という意味を持っていた。このことは，英語の完了形が have を用いていることと無関係ではない。

かった。

c. Juan iba a ahogarse en el río, pero él no murió.

d. フアンは川で溺れかけたが，死ななかった。

もう一つ，ahogar（se）が「溺れ（させ）る」に対応するのではなく，「溺死す（させ）る」という複合語に対応するという考え方がある。つまり，スペイン語には日本語の「溺れ（させ）る」に対応する語がないという見方である。この考え方は，既に近年の辞書ではかなり取り入れられているようである。例えば，『ポケットプログレッシブ西和・和西辞典（小学館）』や『西和中辞典第1版（小学館）』には「溺れ（させ）る」と併記して「溺死す（させ）る」，『現代スペイン語辞典（白水社）』や『西和中辞典第2版（小学館）』には「溺れ（させ）る」の表記がなく，「溺死す（させ）る」としか記載されていない（「窒息（死）させる」や「絞殺す（させ）る」は省く）。逆に，『プログレッシブスペイン語辞典第2版（小学館）』には，「溺れ（させ）る」の表記しかない。

西西辞典で見ると，María Moliner の *Diccionario de uso del Español* では，ahogar を “Matar a alguien sumergiéndole en agua o impidiéndole respirar de cualquier manera”, “Morir alguien por no poder respirar” と説明しており，結果状態を表す「殺す（matar）」ないしは「死ぬ（morir）」が先に説明され，その様態（「殺し方」ないしは「死に方」）は半ば補助的に説明される。また，SGEL の *Gran diccionario de uso del español* でも，ahogar を “Quitar la vida a una persona o a un animal privándole de la respiración, bien sumergiéndole en agua durante un tiempo, bien tapándole las vías respiratorias o apretándole en la garganta” と説明しており，やはり結果状態を表す「命を奪う（quitar la vida）」を第一義的に説明している。また，『Larousse スペイン語版百科事典（2005年度版）』でも，ahogar を “Causar la muerte de una persona o un animal impidiéndole respirar” と説明しており，やはり結果状態を表

す「死を引き起こす（causar la muerte）」を第一義的に説明している。その他，Espasa の *Diccionario de la lengua española para estudiantes de español* では ahogar を “Matar alguien o algo（a una persona o animal）impidiéndole la respiración” と説明し，Real Academia Española の *Diccionario de la lengua española* 第22版（2001）でも，ahogar を “Quitar la vida a una persona o a un animal, impidiéndole la respiración, ya sea apretándole la garganta, ya sumergiéndolo en el agua, ya de otro modo” と説明している。

以上から，スペイン語には日本語の「溺れ（させ）る」に相当する語句はなく，ahogar（se）は「溺死す（させ）る」と結果状態を表す複合動詞で訳した方が正確であると言うことになる。結論を急ぐことはできないが，日本語では，結果状態を複合動詞で表すのに対し，英語やスペイン語では無標の扱いになっているように見受けられる。更に，動詞の様態は日本語では複合動詞が担うのに対し，スペイン語では動詞に組み込まれているか，現在分詞を用いて表現する傾向にあると言える。

日本語ではキャンセルが可能でも，スペイン語ではキャンセルが不可能な語彙が ahogar 以外にもいくつか存在する。例えば，以下の例文を参照。

(24) a. *Juan le persuadió a María para que viniera a la fiesta, pero ella no vino.
b. フアンはマリアをパーティに来るように説得したが，彼女は来なかった。

(25) a. *Fernando llamó por teléfono a Margarita, pero ella no estaba en casa.
b. フェルナンドはマルガリータに電話したが，彼女は留守だった。

(26) a. *Juan le ayudó a María a resolver este problema, pero ella no podía resolverlo.

b. フアンはマリアがこの問題を解くのを手伝ったが，マリアは解けなかった。

(27) a. *Juan asfixió a María, pero ella no murió.

b. フアンはマリアを窒息させたが，彼女は死ななかった。

(28) a. *Juan hirvió el agua, pero no hirvió.

b. フアンは水を沸かしたが，沸かなかった[5]。

(29) a. *Isabel quemó el muñeco, pero no se quemó[6].

b. イサベルは人形を燃やしたが，燃えなかった。

(30) a. *Juan disolvió el hielo, pero no se disolvió.

---

(5) 池上（1981：270-271）は，以下の文を挙げて，日本語でも同じように目的語を使っていても「結果を表す（または含意する）目的語」を伴う場合には，矛盾した感じを最も強く受けると述べている。

（ｉ） a. 沸かしたけど，沸かなかった。

b. ？水を沸かしたが，沸かなかった。

c. ＊湯を沸かしたが，沸かなかった。

これは，日本語の「沸く」が目的語を義務としてとらない（即ち，同じ形態を持ちながら他動詞としても自動詞としても使える）ことを考慮に入れなければならないことを示唆している。スペイン語も英語とは異なり，この種の自他交替は認められるが，それによる「結果性」は薄らいではいないように思われる。

(6) 「水を沸かしたが，沸かなかった」や「人形を燃やしたが，燃えなかった」という表現は，不適格と答えた日本人インフォーマントが２名いた。彼らは「沸かない（燃えない）と想定しうる対象が目的語に来れば，容認度が上がる」と主張して，以下の文を提示した。

（ｉ） a. がちがちに凍った水を沸かしたが，沸かなかった。

b. 燃えにくい紙を燃やしたが，燃えなかった。

更に，「容易に沸く（燃える）と想定しうる対象が目的語に来ても，容認度が上がる」として，以下の文が挙げられた。

（ii） カラカラに乾いた藁半紙を燃やしたが，燃えなかった。

それぞれ，（ｉ）は対象が蒙った影響による結果をあらかじめ想定（含意）できること，（ii）はその想定（含意）に反して，という対比の影響が見て取れる。ここで「燃えやすさ」や「沸かしやすさ」といった意味内容を選択制限（selectional restriction）に組み込むことはできないが，畢竟，日本語でも結果状態を想定するがゆえに表現される要素が選別されることもあるということである。

b.　フアンは氷を溶かしたが，溶けなかった。

(31)　a.　*Juan derritió el helado, pero no se derritió.

b.　フアンはアイスを溶かしたが，溶けなかった。

(32)　a.　*Juan mezcló el agua y el aceite, pero no se mezclaron.

b.　フアンは水と油を混ぜたが，混ざらなかった。

(33)　a.　*Juan le levantó a María, pero ella no se levantó.

b.　フアンはマリアを起こしたが，マリアは起きなかった。

(24) から (33) までの例では，スペイン語には先ほど検討した ahogar と同じ意味構造を持つ動詞句があることを示唆している。即ち，それぞれ動詞句 persuadiar, llamar por teléfono, ayudar a uno a resolver, asfixiar, hervir, quemar, disolver, derretir, mezclar, levanter（se）は結果状態を含意する[7]。従って，対応する日本語が当該命題をキャンセルする文を後続できるのに対し，スペイン語では当該命題をキャンセルする文を後続させると，容認不可能な文となる[8]。

このうち，(24) から (27) までの動詞は，ahogar と同じく対象物が直接目的格として明示されている。(28) の hervir は，単独で他動詞的な振る舞いと自動詞的な振る舞いを同時に見せる語であり，日本語の「沸か

---

(7)　このうち，llamar por teléfono に対応するドイツ語 telefonieren やフランス語 téléphoner は，日本語のように相手が電話に出たことを含意しないようである。しかし，英語 call はスペイン語と同様に結果状態を含意するため，日本語と以下のような対立をなす。

(ｉ)　a.　#John called Mary, but she was out.

b.　ジョンはメアリーに電話したが，彼女は留守だった。

(8)　山梨（2009：101）や池上（1981：266）は，言語類型論的な立場から日本語と英語を分析している。即ち，＜移動＞のスキーマと＜行為＞のスキーマのうち，日本語は＜移動＞のスキーマを重視するのに対し，英語やスペイン語は＜行為＞のスキーマを重視する。また，池上は，一般的に日本語は＜到達点指向性＞が弱く，英語は＜到達点指向性＞が強いとしている。＜到達点指向性＞に関する両言語の違いは，＜起点―経路―到達点＞のスキーマにおける焦点化の違いの拡張のケースとして解釈することも可能である（山梨（2009：103））。

す」（他動詞）と「沸く」（自動詞）とは異なり，語彙的かつ形態的に他動詞と自動詞を見分ける術はない。（29）から（33）の動詞は，再帰代名詞 se をつけることによって他動詞と自動詞の交替が観察される。（29）では quemar（se）が「燃やす」と「燃える」の対立，（30）では disolver（se）が「溶かす」と「溶ける」の対立，（31）では derretir（se）が「溶かす」と「溶ける」の対立，（32）では mezclar（se）が「混ぜる」と「混ざる」の対立，（33）では levantar（se）が「起こす」と「起きる」の対立を示し，それぞれ前者が他動詞的な振る舞い，後者が自動詞的な振る舞いを見せる。

以上から，スペイン語の動詞は多分に結果状態を含意するのに対し，日本語の動詞は結果状態ではなく，その過程に焦点を置くという一般原則を立てることができる[9]。これをスキーマで表すと，以下のようになる。それぞれ，下線部はそれが含意され，かつ焦点が置かれる意味要素，括弧内

---

(9) 同じ言語でも異なる語彙を用いると「結果状態」に焦点を置くか，「過程」に焦点を置くかが変わることがある。例えば，英語の see は結果ないしは着点に注目するのに対し，look は主に行為ないしは過程に焦点が当てられる。以下の文を参照。

（ｉ） a. Bill saw the house.
b. *Bill saw to the house.
c. *Bill saw toward the house.
d. *Bill is seeing the house.

（ii） a. *Bill looked the house.
b. *Bill looked to the house.
c. Bill looked toward the house.
d. Bill is looking at the house.

米山（1996：67）

（ｉ）が示すように see の用法では通常は進行形がなく，着点に注目する性質がある。一方，（ii）の look は進行形を許すこと，過程のプロセスを明示する toward と共に生起できることから，過程を重視する語彙であるといえる。従って，see と look は以下のように一つの文に共起しても矛盾文とはならない。

（iii）I must have *looked* at it a hundred times, but I never *saw* it.

（ｉ）～（iii）が示すのは，look と see の意味領域に違いがあるということである。スペイン語でも「注視する」mirar と「熟視する」contemplar，そして「（一般的な）見る」ver など，この種の対立はいくつも見つかるであろう。

はそれが含意しないこともある要素を示す（ここで注意すべきは，日本語の動詞は結果の「不達成」を含意するのではなく，達成か不達成かを問わないという点である）。

(34)　スペイン語　　行為の過程　＋　結果状態
　　日本語　　行為の過程　＋（結果状態）

スペイン語の動詞の意味構造に存在する「結果状態」を含意させないようにする一つの方法は，ある命題を述べた後に一度音声的なポーズを置き，そして改めて当該命題をキャンセルするような文を後続させることである。

(35)　a.　Juan le persuadió a María para que viniera a la fiesta. Pero ella no vino.
　　b.　フアンはマリアをパーティに来るように説得した。しかし彼女は来なかった。
(36)　a.　Juan ahogó a Carmen. Pero ella no murió.
　　b.　フアンはカルメンを溺れさせた。しかし，彼女は死ななかった。

(35) の意味するところは，フアンはマリアをパーティに来るように説得し，そしてマリアは一度はそれを了承したが，それから時間がしばらく経ってから考え直して，結局はキャンセルしてパーティに来なかった，というものである。つまり，前文と後文は完全に別個な存在であり，音声的にはポーズが，正書法（統語的）にはピリオドがその役目を果たす。(36) も同様に，フアンはマリアを溺死させたように見えたが，後の蘇生術で奇跡的にマリアが息を吹き返したという文脈ならば成立しうる。しかし，かなり強力な文脈的サポートがないと動詞の結果状態の含意を取り消すことは難しいと思われる。

さて，当然のことながら，スペイン語の動詞のうち，意図的な行為を表す動詞が全て結果状態を含意するわけではない。また，日本語の動詞も全て結果状態を含意しないわけではない。それぞれの言語の動詞については以下の可能性が考えられる。

(37) a. スペイン語も日本語も「結果状態」を含意する動詞。
b. スペイン語も日本語も「結果状態」を含意しない動詞。
c. スペイン語では「結果状態」を含意するが，日本語では「結果状態」を含意しない動詞。
d. スペイン語では「結果状態」を含意しないが，日本語では「結果状態」を含意する動詞。

(37a) に相当する動詞に「殺す（matar)」が挙げられる。この動詞はスペイン語も日本語も「結果状態」を含意する。

(38) a. *Juan mató a María, pero ella no murió.
b. *フアンはマリアを殺したが，彼女は死ななかった。

(38) の動詞「殺す（matar)」は両者とも「マリアが死んだ」ことを含意するため，当該命題をキャンセルする文を後続させると容認不可能になる[10]。

---

[10] matar（殺す）は「結果状態を含意する」動詞というより，「結果状態も表す動詞」とした方が適切かもしれない。例えば，英語の shoot，スペイン語の disparar には「（対象を）撃ったら死ぬだろう」という推測的意味（implicación）が働くため，当該命題をキャンセルすることはできない。なお，英語の shoot を『ジーニアス英和大辞典（大修館書店)』で見ると「弾丸などが当たることで，その結果負傷させたり殺したりすることを含む」と但し書きがついている。日本語の「撃つ」にはこの推測的意味は組み込まれていない。
(i) a. *Mary shot the enemy, but he was not dead.
b. *María disparó contra el enemigo, pero él no murió.

また，「増やす（aumentar）」も同様に（37a）に相当する動詞である。スペイン語では aumentar が自動詞にも他動詞にも使えるが，日本語では「増やす」と「増える」という形態的な自他交替を見せる。

（39）　a.　*Juan aumentó la inversión, pero no aumentó.
　　b.　*フアンは投資を増やしたが，増えなかった。

（37b）に相当する動詞に「招待する（invitar）」が挙げられる。この動詞はスペイン語も日本語も「結果状態」を含意しない。

（40）　a.　Juan invitó a María a la fiesta, pero ella no vino.
　　b.　フアンはマリアをパーティに招待したが，彼女は来なかった。

（40）の動詞「招待する（invitar）」は両者とも「来る」という結果状態を含意しないため，当該命題をキャンセルする文を後続させても容認可能である。

本稿で集中的に見てきたパターンが（37c）であるため，ここでは繰り返さない。

（37d）のパターンは管見では見当たらない[11]。即ち，先に示したスキーマ（34）がスペイン語と日本語の動詞の基本的意味構造ということになる。

---

c.　マリアは敵を撃ったが，敵は死ななかった。

しかし，動詞 matar「殺す」には，既に行為としての結果状態が「推測的意味」ではなく，語彙項目に記載されている情報と考えた方が自然である。

⑾　池上（1981：267-268）や池上（1996：173）では，英語が結果の達成を常に含意し，達成を必ずしも含意しないのは日本語であるとしている。この点から見ると，スペイン語と英語は動詞の意味構造が似ているということになる。なお，達成を含意することから来る場所理論における運動動詞の達成についての研究は池上（1981：263-265），Anderson（1971）などを参照。

5．スペイン語と日本語の動詞のスキーマ

以上から，スペイン語は日本語に比べて動詞の行為によって引き起こされた「結果状態」を重視する言語ということができる。つまり動詞の行為の結果として生じる「状態」を含意する傾向が強い言語である。

さて，スペイン語と日本語を対比した（34）のような図式は，既にTalmy（1988）やLangacker（1990）がビリヤード・モデル（action chain），Croft（1991）が因果連鎖（causal chain）という説明原理を用いて説明している。最後に，スペイン語の動詞と日本語の動詞の因果連鎖を概観する。本稿では既に「溺れ死ぬ（ahogarse）」の分析を行ったが，それを因果連鎖で示すとどうなるか，以下の文を参照。

（41） a. Juan ahogó a Carmen en el río.
b. フアンはカルメンを川で溺れさせた。

繰り返すように，スペイン語で表した（41a）はカルメンが死んだことを含意するため，キャンセルすることができない。対応する日本語（41b）はキャンセルが可能である。

（42） a. *Juan ahogó a Carmen en el río, pero ella no murió.
b. フアンはカルメンを川で溺れさせたが，死ななかった。

（42）を踏まえたうえで，（41）の因果連鎖は以下の通りである。

（43） a. Juan　　Carmen　Ahogarse　Morir

b.　フアン　　カルメン　溺れる

●　→　●　→　●　→　●　→　●

VOL　ACT　CAUSE　MOVE

（VOL は volition，ACT は action を表す）

スペイン語のビリヤードモデル（43a）は，Juan が意図（volición）を持って Carmen が溺れて死ぬ原因となる行為を行ったことを示す。その時，下線で示したようにその結果となる「溺れて，そして，死ぬ」という状態がクローズアップされる。一方，日本語のビリヤードモデル（43b）は，フアンが意図を持ってカルメンが溺れる原因となる行為を行ったことまでは同じだが，それによって伴う結果（カルメンが死んだ状態）は含意されない。従って，日本語の動詞「溺れ（させ）る」では，黒丸で表された参与者（participantes）がスペイン語の動詞 ahogar（se）よりも少ない。「溺れ死ぬ」「溺死する」という複合動詞にすると，スペイン語の ahogar（se）により近くなる。

6．結語

本稿では，スペイン語と日本語を比較しながらスペイン語の他動性に関する考察を行った。スペイン語の動詞は日本語のそれに比べて他動性が高く，ある動作の結果状態が意味構造の中に含まれることを見た。一方，日本語の動詞は動作の結果状態を表すために複合語にするなどの有標的な操作が必要になる。

以上から，スペイン語の動詞には行為の「結果状態」という意味役割における参与者が多数存在するが，日本語には行為の「結果状態」の参与者が入る動詞が少ないという一般化が可能だと思われる。

参考文献

Anderson, J. M. *The Grammar of Case: Toward a Localistic Theory*. Cambridge University Press. 1971.

Croft, W. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press. 1991.

Goldberg, A. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press. 1995.

池上嘉彦『「する」と「なる」の言語学』大修館書店．1981.

池上嘉彦『＜英文法＞を考える―＜文法＞と＜コミュニケーション＞の間』ちくまライブラリー．1991.

池上嘉彦『英語の意味』テイクオフ英語学シリーズ３．大修館書店．1996.

Langacker, R. W. “Active Zones”. *BLS,* 10: 177–188. 1984.

Langacker, R. W. “An Introduction to Cognitive Grammar”. *Cognitve Science,* 10(1): 1–40. 1986.

Langacker, R. W. “Setting, Participants, and Grammatical Relations.” In Savas L. Tsohatzidis, eds., *Meaning and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*. 213–238. Routledge. 1990.

Langacker, R. W. “Reference-Point Constructions”. *Cognitive Linguistics*, 4(1): 1–38. 1993.

Langacker, R. W. “Form, Meaning and Behavior”. In *Cognitive and Communicative Approaches to Linguistic Anaysis*. (ed.) Ellen Contini-Morava, Robert Skirsner and Betsy Rodriguez – Bachiller, 21–60. John Benjamins. 2004.

Talmy, L. “Force Dynamics in Language and Cognition.” *Cognitive Science* 12. 49–100. 1988.

Taylor, J & 瀬戸賢一『認知文法のエッセンス』大修館書店．2008.

山梨正明『認知構文論』大修館書店．2009.

米山三明「語彙の中の意味関係」池上嘉彦編『英語の意味』テイクオフ英語学シリーズ３．第４章：55–70．大修館書店．1996.